

功利主義的幸福論か
——児玉聡『功利主義入門』について¹
2012年9月22日

浅野幸治

初めに、本書への小さな賛辞をいくらか述べたい。

- 1、「はじめに」で述べられる武道の喩えは上手で、よい。
- 2、文章が平易で分かりやすく、よい。

ただし、「利益」は得たり失ったりするものであって、「満た」したり「充足させ」たりするものではないと思われる。利益を「満たす」とか「充足させる」という（日本語ではなくて）翻訳語を使っていたのでは、一般の読者から倫理学が理解されないと危惧される。

- 3、外来語の使用があまり多くなくて、よい。

ただし、ケース、ブックガイド、ルール、オリジナリティ、ボランティア、ドキュメンタリー、パートナー、ショッキング、ジレンマ、キャラクター、トラブル、サンクション、ピア・プレッシャー、タイトル、プレゼント、セレブ、カップル、ゴシップ、ファン、マシーン、チェック、メリット、デメリット、レベル、フィクション、システム、テーマ、イメージ、レジ、バイアス、コマーシャル、メッセージ、サイドメニュー、オプション、エンパワー、プログラム、レーン、フルーツ、キャンペーン、モニタリング、リスク、クリア、メーター、パラドクス、ニーズ、リスト、ケア、バーチャル、マイナス、コントロール、ニュース、エリート、ストレス、セット、メディア、スタッフ、グループ、ネグレクト、バージョン、リテラシー、マイノリティ、アプローチ、コメント、アイデア、スキルくらいは、なんとか日本語で書いてもらいたい。

この関連で言うと、本書には英米の倫理学者の名前が比較的多く出てくる。その結果、読者は、英米の思想史を勉強させられているという印象をもつかもしいない。できれば、英米の倫理学者の固有名を一切出さずに、功利主義の入門書を書くこともできるのではないか。

- 4、本論とどういう関係にあるのかよく分からないが、巻末にあるマルクス・アウレリウスやエピクロス、エピクテートス、パスカルからの引用は本書に潤いを与えていて、よい。

実際のところ、児玉は巻末のブックガイドに20頁を費やしているけれども、その

¹ これは、2012年9月22日に京都生命倫理研究会での合評会で発表した原稿である。本稿で言及される頁数は、とくに断りが無い限り、児玉聡『功利主義入門』（ちくま新書、2012年）の頁数である。

中で引用されるのは、ピーター・シンガーとプラトン、バートランド・ラッセルとすぐ上で述べた4人である。特にアウレリウスからの引用は3回に及ぶ。こうした引用は、児玉の本当の関心のありかを示しているようにも思われる。もう少し細かく見ると、ブックガイドの20頁のうち、「はじめに」のブックガイドに3頁が費やされ、「第1章」のブックガイドには2頁が、「第2章」には1頁が、「第3章」にも1頁が、「第4章」には2頁が、「第5章」には4頁が、「第6章」の幸福論には5頁が、最後の「第7章」には1頁が費やされる。もちろん、「第6章」幸福論にあてられるブックガイドの頁数が多いのは、引用が多いからという理由がある。けれどもそれを差し引いて、ブックガイドで言及される文献数の点でも、「第5章」のブックガイドで挙げられる文献の数が14であるのに対して、「第6章」のブックガイドで挙げられる文献の数は19である。

それでは、本論に入っていこう。本書は倫理学の入門書として、最初に倫理学についての誤解を退けてから倫理学の紹介に入っていくという順序をとっている。この入り方は、児玉も挙げるレイチェルズ『現実をみつめる道徳哲学』やブラックバーン『ビーイング・グッド』と共通である。そこでまず、レイチェルズやブラックバーン、児玉がどのような誤解を取りあげ退けているのかを較べてみよう。

レイチェルズ

- 1、文化的相対主義
- 2、主観主義
- 3、宗教的基盤
- 4、心理学的利己主義
- 5、倫理的利己主義

ブラックバーン

- 1、神の死
- 2、相対主義
- 3、利己主義
- 4、進化論
- 5、決定論
- 6、不合理な要求
- 7、虚偽意識

児玉

- 1、相対主義
- 2、宗教的基盤

3、利己主義

4、「自然に従う」主義

5、倫理学は「非倫理的」

レイチェルズの特徴は、文化的相対主義と主観主義、それから心理学的利己主義と倫理的利己主義を細かく区別していることである。児玉の入門書は小さな本なので、そのような区別がない。（もちろん、児玉は主観主義や倫理的利己主義を挙げていないと読むこともできるだろうが。）そうした小さな違いを除けば、児玉が挙げる最初の3つの誤解は、レイチェルズやブラックバーンが挙げるものと共通である。ただしブラックバーンの場合、利己主義と進化論と不合理な要求は互いに関連があると思われるが、それら3つを別立てで論じている。ブラックバーンに真に独特なのは、決定論と虚偽意識である。他方、児玉に特有なのは、「自然に従う」主義と倫理学は「非倫理的」という考えとである。「自然に従う」主義は日本で比較的優勢なので、児玉がこれを取りあげるのはまことに適切である。ちなみに、これらさまざまな考え方をレイチェルズが「挑戦」と呼び、ブラックバーンが「脅威」と呼んでいるのに対して、児玉は単に「誤解」と呼ぶ。実際、倫理学は「非倫理的」という考えは、「挑戦」や「脅威」というよりも「誤解」であろう。

また、倫理学に対する誤解を退けた後、功利主義を紹介し、それから功利主義を批判し洗練するという児玉の進み方は、レイチェルズとも共通である。恐らくこれが、レイチェルズや児玉に限らない、標準的な順序なのだろう。

ところで、功利主義の入門書が相対主義の批判で始まるというのは、私には皮肉だと思われる。というのは、功利主義は相対主義と親和的だからである。（歴史を振り返れば、プロタゴラスは相対主義者でありかつ快楽主義者であったとプラトンによって描写されている。）なぜなら、功利主義は元々、快苦を主観的なものと理解するからである。したがって、功利主義によれば、行為の正・不正は、人々が快を感じるか苦を感じるかによって決まるけれども、人々が何を快と感じ何を苦と感じるかは文化により個人によりさまざまであり得るからである。かくして、功利主義は奴隷制社会を比較的容易に許容し得るように思われる。奴隷所有階級は奴隷所有に喜びを見だし、奴隷階級は奴隷であることに喜びを見だしさえすれば、よいのである。実際に、奴隷制社会では、奴隷所有階級の子供は、奴隷所有に誇りを感じ、その地位を失うことに甚だしい憤りを感じるように養育されるだろう。奴隷階級の子供は、主人に仕えることに喜びを感じ、主人と対等になることなど夢にも思わないように養育されるだろう。そういう奴隷制社会では、奴隷制が人々を幸福にし、奴隷制廃止の提案は人々に歓迎されないだろう。言うまでもなく、これは適応的選好とか不合理な選好と呼ばれる問題である。

ちなみに、児玉は、92頁で奴隷が多数者であったかのような書き方をしているけれども、歴史的事実としては奴隷は古代でも近代でもたいていの場合、少数者であった。（有名な例外はスパルタであり、スパルタでは農奴の人口が自由人の人口よりもずっと多かった。）

次に私は、児玉が挙げる功利主義の3つの特徴のうち、帰結主義の説明（54～55頁）に納得がいかない。児玉によれば、功利主義は結果論ではなくて、

「こう行為すると、こういうことが結果として起きるだろう」という事前の予測に基づいて、行為の正しさを評価するものである。（55頁）

では、誰が予測するのだろうか。まず、行為者自身であると仮定しよう。そうすると、ほとんどの人のほとんどの行為は、「こう行為すると、こういう良いことが結果として起きるだろう」という予測に基づいて行われるので、正しいということになるだろう。例えば、2・26事件を起こした将校たちの行為も対米開戦に踏み切った政策担当者たちの行為も正しかったということになるだろう。しかしそれでは、行為をその意図によって評価するのと変わらないだろう。予測は単に予測であって、当たることもあれば外れることもある。予測は、結果に照らして、正しかったとか正しくなかったと判断されるべきである。したがって、正しくない予測に基づいた行為も、正しくない。

では次に、行為者ではなく別人が予測すると仮定しよう。例えば、Aさんは、自分が「こう行為すると、こういう良いことが結果として起きるだろう」という予測に基づいて、ある行為をしようとしている。Bさんは、Aさんが「こう行為すると、こういう悪いことが結果として起きるだろう」と予測して、Aさんの行為を正しくないと思っている。この場合、Aさんの行為は正しいのか、正しくないのか。あるいは、Aさんの行為は、Aさんにとっては正しく、Bさんにとっては正しくないのか。このような相対主義は、受け入れられないでしょう。そこでもう1つ、Bさんの予測のほうが客観的に見て合理的だと仮定しよう。すると、Aさんの行為は正しくないということになるだろうか。しかし、客観的に見て合理的な予測が当たるとは限らない。例えば、天気予報は客観的に見て合理的な予測であるが、しばしば外れる。そこで、Bさんの予測が外れてAさんの予測が当たったと仮定しよう。そうすると、Aさんの行為は、事前には正しくなかったけれども事後には正しくなったと言うべきだろうか。しかし、正しくなかった行為が時間の経過によって正しくなるというのも奇妙である。むしろ、正しくないと思われた行為が実は正しいことが明らかになったと言うべきだろう。

予測はあくまでも暫定的な評価であって、行為の客観的な評価は実際の結果に基づいて行われるべきであろう。言い換えると、功利主義にとって、行為の正しさの究極的な判定基準は実際の結果であろう。

児玉は、第3章と第4章で、功利主義を批判することで功利主義を洗練する。その結果出てくるのが、規則功利主義である。

第2章から第4章までが功利主義の入門編とすれば、第5章は応用・実践編である。この第5章「公共政策と功利主義的思考」は、児玉が力を込めたいところだと思われる。そこで児玉は、功利主義の2つの顔として、権威主義的功利主義と自由主義的功利主義を区別する。

しかし、そこへ行く前に、児玉は「自然権の思想には少なくとも二つ問題があるように思われる」と述べているので（101頁）、私は児玉に反論しておきたい。児玉によれば、自然権の思想の第1の問題として、「「自然の権利」が存在するという主張」の「根拠を示すのが難しい」（102頁）。しかし私たちは、道徳的直観によって、生命、自由、財産という3つの自然権を見いだすことができる。実際、ほとんどすべての人間社会に普遍的に見られる、殺すな、傷つけるな、盗むなという3つの道徳的戒律は、これら3つの自然権に対応している。よって、生命権と自由権と財産権が人間に本来的に備わる権利であることは、ほぼ磐石である。そしてロック流の自由主義が認める自然権は、これら3つだけである。児玉によれば、自然権の思想のもう1つの問題は、「自然権を認める対象の範囲が明確でなく、その適切な範囲について議論するのも難しいということ」である（102頁）。しかし、一般的に言って、境界線が明確でないことは、白が白であり黒が黒であることの妨げにはならない。例えば、児玉は、「受精卵に「自然権」はあるのか」と問う（102頁）。仮にこの問いに答えることが難しいとしても、成人に自然権があり、精子や卵子に自然権がないことは、ほぼ万人の同意が得られるだろう。また児玉は、「同性愛者に結婚する「自然権」はあるのか」とも問う（102頁）。そもそも結婚は人為的な制度なので、「結婚する自然権」というのはいささか奇妙な表現である。それでもこの問いにまっすぐ答えるとすれば、すべての人間に自由権があるので、結婚するのもしないのも自由、子供を作るのも作らないのも自由、したがってまた男と女が結婚するのも自由、男と男が結婚するのも自由、女と女が結婚するのも自由ということになる。ここで児玉は、自然権と、児玉が最初に退けた「自然に従う」主義とを混同しているように思われる。最後にもう1つ、児玉は、「チンパンジーのような動物にも「自然権」はあるのか」と問う（102頁）。しかし、これに対しては、アサリも快苦を感じるのかという同種の問題が功利主義にもつきまとうことを指摘すれば充分だろう。一般的に言えば、「快苦を感じる対象の範囲が

明確でなく、その適切な範囲について議論するのも難しい」ということである。したがって、児玉が述べる第2の問題は、特に自然権思想を退ける理由にはならない。

それでは、功利主義の2つの顔に戻ろう。1つ目の顔である権威主義的功利主義は、人々の生活に介入するのが特徴である。2つ目の顔である自由主義的功利主義によれば、人々の幸福にとって個人の自由は絶対必須の条件であって、児玉も引用しているミルの次の言葉が自由主義的功利主義の特徴をよく示している。

公衆衛生に関する法の本来の目的は、人々が自らの健康に留意するように強要することではなく、人々が他者の健康に危害を加えるのを防止することである。もし彼らが自分の健康のためだけに行うべきことを法によって命じるならば、当然、大半の人々はそれを圧政そのものと見なすであろう。(115頁)

このように2つの功利主義を区別した後で、児玉は、現代では権威主義的功利主義が不人気であり自由主義的功利主義が優勢であることを認める。しかし、児玉自身の立場はどうか。児玉によれば、「ミルの立場だとあまりに個人の自由を尊重しすぎており、現在の公衆衛生活動の多くを正当化することができな」い。「そのため……ミルの立場を何らかの形で「乗り越える」必要がある」と児玉は主張する(117頁)。要するに、児玉は自分が権威主義的功利主義者であることを明らかにしている。(ただし児玉自身は、自分が権威主義的功利主義者ではなくて、自由主義的功利主義を修正するのだと考えているようである。)そう理解して、権威主義的功利主義の説明を振り返ってみると、児玉は次のように述べている。

チャドウィックの活動は……余計なお世話として非難されたのだ。
このような態度は……個人の自由の侵害にさえなりかねない。
チャドウィックの姿勢は……パターンリスティックに映ったのだった。
(112頁)

こうした間接的、非断定的な表現は、児玉の本心を指し示しているかもしれない。すなわち、児玉の本心としては、このような態度は、個人の自由の侵害になる可能性があるけれども、常にそうなると限ったわけではなくて、そうならない可能性もある。チャドウィックの活動は、余計なお世話として非難されただけであって、現実には余計なお世話ではなかった。チャドウィックの姿勢は、パターンリスティック

クに映っただけであって、現実にはパターンリスティックではなかった、というわけである。

実際のところ、この点に関して児玉が考える方向性とはどのようなものか。児玉の基本的な理解は、「人間はあまり合理的に行動しない」というものである（122頁）。そこから、「功利主義は……個人の自由の制限は最小限にしつつ」も、人々の健康を増進すべきだということになる（125頁）。言い換えると、人々の健康を増進するために、個人の自由を少しだけだったら制限してもいいでしょう、というのである。

具体的に喫煙規制の場合を見てみよう。児玉によれば、「たばこの自販機やライター、灰皿を目に付きにくいところに置くことで喫煙の誘因を減らすという「ナッジ」的戦略」は正しい（128～129頁）。「たばこ税を上げるなどによって、たばこを吸いたい衝動に抗う動機を作り出すことも正当化される。」（129頁）しかしそもそも、どうして自分の健康を害してはいけないのか。喫煙によって自分の健康を害することがどうして不合理なのか。喫煙によって自分の健康を害した人が後悔するからか。しかし、喫煙によって自分の健康を害したすべての人が後悔するとは限らないだろう。

ここには、2つの問題がある。1つは、こうした介入によって人々の幸福が増大するか減少するかである。喫煙の快楽は相当に大きいだろうから、喫煙を止めることによって人がより幸福になるとは限らない。もう1つは、喫煙を止めることによってより幸福な人生が得られるとしても、どうしてより幸福な人生を送らなければならないのか、ということである。この点に関して、功利主義は私たちに、幸福な人生を、幸福な人生よりもっと幸福な人生を、もっと幸福な人生より最も幸福な人生を道徳的義務として課してくるように思われる。

さてそこで、第6章は、幸福についてである。ここで、幸福をどう解釈するかということに関して、児玉はまず、快楽だという説と欲求充足だという説を検討する。快楽はあまりにも主観的であり、欲求充足にも適応的選好とか不合理な選好とかの問題がある。幸福を合理的な欲求充足と解釈し直せば、客観的利益説と違わなくなる。ここで「利益」という言葉は、最初のほうでも少し述べたけれども、特殊な意味で用いられているので、注釈・説明が要るだろう。ここで言う「利益」とは、客観的に本人のためになるとか本人にとって得になるという意味であろう。客観的利益説の最大の問題は、児玉によれば、「真に客観的なリストを作るのが難しい」ということである（163頁）。

ただし政治的には、客観的利益説で「かなりうまく行く。」なぜなら、人々に共通する最大公約数と言える利益のリストを作ることができるからである。これは、

功利主義の発展としては穏当である。つまり、快樂説から客観的利益説への発展は穏当であると思う。ただし、客観的利益説はアリストテレス的な幸福主義（卓越主義）とあまり変わらなくなる。ちなみに児玉は165頁で「最小公約数」という言葉を用いているけれども、任意の2つの自然数の最小公約数は常に1である。最大公約数の間違いであろう。そうすると結局、児玉の主張は、幸福＝合理的な欲求充足＝客観的利益の実現ということになりそうである。個人の次元で考えた場合も同様である。児玉の教えは、合理的な欲求をもつべしというものである。

最後にこの章において、児玉はしばしば、ソクラテスを引き合いに出して、所得や富、健康、家族や友人などこれらすべてに共通する性質は何なのかという形で「幸福とは何か」を問う。ここで児玉は、幸福の構成要素を幸福の例と混同しているように思われる。たしかにソクラテスは、徳の例に共通する性質を問うた。しかし、所得や富、健康、家族や友人は、幸福の例ではない。したがって、それらに共通する性質など求めようがない。例えば、レンズとフレームは眼鏡の構成要素であって、眼鏡の例ではない。したがって、レンズ＝眼鏡ではない。レンズとフレームの両方が揃ってはじめて眼鏡である。同様に、所得＝幸福ではない。所得や富、健康、家族や友人などがすべて揃ってはじめて幸福である。

第7章「道徳心理学と功利主義」は、本論とどう関係付けたらよいのか分からない、付録のように私には思われる。たしかに、「なぜわれわれは援助しないのか」を考えることは、功利主義者にとって重要だろう。そこで、人々にもっと援助させるために取るべき戦略として、児玉は3つを挙げる。第1に、共感能力を陶冶しよう。第2に、生々しい映像を活用しよう。第3に、合理的思考力を陶冶しよう。これらの戦略については、ピーター・シンガーも賛成するだろう。ただし、児玉もよく知っているように、シンガーはさらに踏み込んで具体的に所得帯ごとに標準的な限界寄付率を提案している（*The Life You Can Save*, 164）。児玉は、大胆なナッジ的戦略を提案しないのだろうか。児玉は、少なくとも、「寄付税制を改革してNGOへの寄付を容易に」すると述べている。より具体的に述べてもらいたい。